

推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1994



1994年版 日本推理作家協会編



The mystery annual of Japan 1994

1994=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社



1994年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集

1994年6月10日 第1刷発行

編 者 日本推理作家協会
発行者 野 間 佐 和 子
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112-01
電話 編集部 03(5395)3505
販売部 03(5395)3622
製作部 03(5395)3615

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© 日本推理作家協会 1994 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-114536-3 (文2)

1994年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序		阿刀田 高	5
ジョーカーの当惑		大沢在昌	9
サンタクロースのせいでしょう		若竹七海	41
ル・ジタン		斎藤 純	61
相撲好きの女		佐野 洋	103
地を這う虫		高村 薫	125
藤田先生と人間消失		村瀬継弥	159
夜の二乗		連城三紀彦	179
獣の家		小池真理子	205

めんどろみであげるね	鈴木輝一郎	231
私に向かない職業	真保裕一	253
盗まれて	今邑 彩	273
尽くす女	夏樹静子	293
のっぽのドロレス	宮部みゆき	315
蒐集の鬼	山口雅也	341
疑いの車中	日下圭介	365
推理小説・一九九三	二上洋一	387
SF1993年	風見 潤	393
受賞リスト		398

写真 装幀
長 細谷 巖
隆治郎

序

日本推理作家協会理事長

阿刀田 高

すべての小説がミステリーである。

なにかしら謎が提示され、少しずつ解けて行き、更なる謎が生じ、やがて大団円を迎えて解決する。時代小説も、恋愛小説も、私小説でさえもが、この構造と無縁ではあるまい。

違うだろうか。

もちろんたった今「すべての小説」と書いたのは書き過ぎであり、レトリックであり、推理作家協会理事長の鼻^{ひな}眼^{まなこ}なのだが、それとはべつに、ミステリーの要素が小説にとって想像以上に重要なものであることは断言してよいのではなからうか。

桐壺帝の御子がどんな運命を担い、どんな生涯をたどるかは大きな謎であり、大菩薩峠の頂上で訳もなく巡礼を殺した机竜之助の生涯と人格もまた謎に充ちている。マディソン郡の橋でめぐりあった一組の男女の過去と未来も、私たちの日常と繋る謎を含んでいる。

こう考えるとミステリーの範囲は無制限に広がってしまうのだが、その中でもとりわけ謎の提示と謎解きの色合いが濃く、明らかにそのことを意図して書かれたものが、広義のミステリー小説ということになるのだろう。

本書は一九九三年に発表された広義の短篇ミステリーの中から十六篇を選んで上梓するものである。お読みいただければ明らかのように、殺人があり探偵役が登場し犯人が挙げられ絵解きが表示される、という作品はむしろ少ない。

書く立場から言えば、そういう作品は四百字詰め原稿用紙で百枚を越えてしまうケースが多く、本書のように少しでも多くの作品を年鑑として紹介したいという計画には適応しにくいところがないでもない。だから、ここではむしろミステリー短篇の持つ領域の広さを賞味していただきたいと思う。

何百という作品の中から、たった十五篇。当然のことながら、ここに選ばなかった作品の中にも数多^{すな}名作はあるのだが、選んだものは、まちがいなく一九九三年の輝かしい成果である。

一九九四年四月

1994年版推理小說年鑑
推理小說代表作選集

ジョーカーの当惑

大沢在昌

大きな仕事をした。ひと月は仕事をしなくても暮らせていけそうだ。それを沢井に告げるため、私はでかけていった。

そのバーは、六本木の外れ、飯倉片町から麻布台へと抜ける目抜き通りの裏側にある。表通りに面した高級イタリア料理店と中でつながっているが、客の行き来はほとんどない。

表通りの店は、青山や六本木に高級フランス料理とかわらない値段をとるイタリア料理店がオープンするまでは、子供向けでないパスタ料理を食べさせる、唯一の存在だった。おかげで客は有名人や金持やらがひきもきらず、店内は最新ファッションの、店の前の通りは高級外車の、陳列場となっている。

反対に、裏側にあるバーはいつもひっそりとしていて暗く、店の人間はバーテンダーがひとりいるにすぎない。客

も常連ばかりで、皆どこか変わっている。たいてい、人にいえない過去をもち、今も堂々と看板をだせないような稼業で暮らしている。

私もそのひとりだ。仕事はしごくまともだが、やり方がまともでないことに定評がある。もちろん、そうした評判がたてばたつほど、仕事の方は増えこそすれ、減ることはない。

私にとつては、この店は連絡事務所である。年中無休で午前四時まで開いており、客の素姓に気をとめないことは、ひどく使い勝手がいい。

ただし、バーテンダーである沢井には、そのために飲み代以外のチャージも払っている。

この店を訪れ、私につけられたある渾名を口にする客がいれば、それはバーではなく、私の客、ということになる。沢井はその客のために一杯目だけは店の奢りをだす。二杯目以降が誰の勘定になるのか、私は知らない。というのも、私に仕事を頼みにきた客で、この店で二杯以上の酒を飲んだ者はいないからだ。

その夜、私がバーに入っていくと、カウンターをはさんで沢井の向かいに筒野がいた。でっぷりと太っていて、着ているものはそれほどではないが、腕時計や指輪、カフス、ネックレス、ブレスレットなど装飾品をあわせると、

優に一億をこえる金額を身につけている。筒野という名はもちろん本名ではない。この店でそう呼ばれているだけだ。

筒野の仕事は、密輸専門の運び屋だった。ただし、麻薬と武器の類にだけは手をださない。そのどちらもが、密輸が発覚した国によっては死刑になるからだ。身につけているものが高価なのは、つかまつた場合、即座に賄賂としてさしだし逃れるためだと聞いている。

筒野もこのバーを根城にし、連絡事務所になっている。つまり、私と同じで、この陰気な店にしては高い酒代を払っている仲間だ。

バーテンダーの沢井は、もとプロボクサーで、いいところまでいったが、ボクサーとしては致命的な欠点である「グラス・ジョー」のため、一度落ちるところまで落ちた男だった。私がそれを知ったのは、今からもう何年も前に、ある賭場で用心棒をしていた沢井を、その賭場の裏にある工事現場に落ちていたスチールパイプで殴り倒したときだった。

互いにそのときは仕事だった。したがって恨みやわだかまりはない。

おしなべてプロとはそういうものだ。陽のあたる世界ならともかく、この裏側の狭い社会では、商売敵などにいち

いち恨みを残していたら、殺しあつたあげくひとりもいなくなってしまう。スポーツマンシップなどカケラもない業界だが、いつまでも恨みをもちこせば結局は自分が生きづらくなるだけなのだ。

筒野は好物のフローズンダイキリを前にしていた。ダイヤモンドの巨石が光る丸まつちい指で、ひょいとグラスをもちあげてみせた。

「いらつしやいませ」

四十に手が届こうというのに、きのうまでデイスコのボーイをしていたとしか見えないような沢井が、やけに嬉しそうな声で私を迎えた。今どきもう、潰してゲームセンターかカラオケボックスにした方が儲かりそうな日焼けサロンに通っていて、やけにきれいな小麦色の肌をしている。笑うと、まっ白な総入れ歯が光るのが自慢だ。ときどき、そうなる原因を作ったのが私であることを思いださせるために、日焼けサロンに通っているのではないかと、私は思うことがある。

「今日はずいぶん早いですね」

筒野とはふたつおいたスツールに腰をおろした私に、沢井はいった。

「ちようどよかった」

「よかった、とは？」

私は沢井を見やった。嬉しそうな顔から、およその見当はついていた。

「さっき女の声で電話がありました。何時頃、きているか
つて」

「俺がか」

私はいつて、ちらりと筒野を見やった。聞こえないふりをしていた。互いに仕事は知っているが、その中味を話題にすることはめつたにない。

「もちろんですよ。あと一時間くらいしたらくるんじゃないですかね」

「じゃあ、断わつてもらおう」

「え？」

沢井は心底、驚いたような顔をした。本当は私がなぜそういうのかを知っている筈なのだ。一件の仕事で私が見る報酬の四分の一は、沢井の懐ろに入る。

「休み、とるんですか」

不服そうに沢井は唇を尖らせた。

「ああ。どこか南の島にでも飛んで、のんびりしようと思つている。今日はその行先を筒野さんに相談してきたんだ」

「ゴルフ、釣り、それともビーチで寝そべるだけかね」
筒野がすすっていたダイキリのグラスをおろし、いつ

た。チンチン、という澄んだ音がする。ダイヤをグラスに軽く当てているのだ。

「全部いいですね。ついでに恐い病気の心配もない女の子がいれば最高だ」

筒野は面白がつているような表情で私を見た。

「本気で知りたいのかね」

「ええ」

筒野は沢井を見た。

「メモ用紙を」

ふくれつ面の沢井は、カウンターの内側からメモ用紙をとりだした。飯より金を数えるのが好きな男だ。私と同じように大枚を稼いだくせに、私が休んで次の仕事の取り分が入らなくなるのが面白くないのだ。

メモ用紙をうけとった筒野は、背広の内側から純金製のボールペンをとりだした。頭のところにはルビーと覚しい石が埋められている。

メモ用紙にそれで何ごとかを書きつけ、折り疊んだ。

私に向き直る。

「電話番号を書いておいた。ジャカルタに飛んで、この番号にかけるといい。三十分で迎えのリムジンがくる。七十年ほど前からいから、インドの王族や植民地政府のヨーロッパ人高官が使っていた会員制のリゾートクラブだ。電話

番号の下に書いてある六桁の数字が紹介者番号だ。望むものは、すべてそこで手に入る。ただし、この番号の有効期間はあと四日、今月いっぱいだ。毎月、変わるのですね」

「明日、渡ちますよ」

私はいつて手をさしだした。筒野はゆっくりと首をふつた。人のよさそうな、中小企業の親爺おやじといった顔に笑みを浮かべた。

「紹介料をちようだいする。十万円ほど」

私は肩をすくめ、財布をとりだした。十枚の一万円札とひきかえに、筒野はメモを私によこした。

開くと、ふたつの数字が並んでいるだけだ。

「もとはとれますね？」

見やった私に、筒野はグラスをふつた。

「保証しよう。引退したらそこに永住するのが私の夢だ」

「そいつはすごい」

沢井が私の手の中のメモ用紙を見つめ、いった。

私は意地悪く、それをひらひらさせてやって胸ポケットにしまった。

「お前さんなら明日にでも引退して、ここに住めるのじゃないか」

「よくいますよ。しがたない酒場の親爺に」

「年中無休でやっていけば、しこたまたまだろう」

「お客さんがなかなか協力して下さらなくてね」

沢井はわざとらしくため息をついてみせた。

「とにかく、客がきたら、俺はいないというんだな」

「わかりましたよ」

そのとき、店の扉が開いた。

「いらつしやいませ」

ソバージュにした髪をたらしした背の高い女だった。丈の長い黒いコートを着け、バックスキンのブーツをはいている。おかまに聞こえそうな低い声でいった。

「あの、ジョーカーってお客さんは」

沢井が私を見た。私は返事をせず、女には背中を向けるようにしてすわっていた。

「まだ、お見えになっていません。ひよつとしたら今日は見えないかもしれません」

沢井が答えた。私は心の中で、沢井を罵ののしった。休みだから当分こないといえはいいのだ。いすわられてしまうかもしれない。沢井の好みが、大柄でバツくさい顔であることを、私はそのときになって思いだした。

「では、少し待たせていただいていいですか」

女がいい、沢井は、

「どうぞ、おすわりになつていて下さい」

と、奥にある小さなブースを指さした。

「ありがとう。あの、ビールを下さい」

「はい」

女は私のうしろを通りすぎ、ボックスに腰かけた。私は覚悟を決め、煙草に火をつけた。

「あら」

女がいった。やはりだ。勘のいいところがある女だから、気づかずににはすまないと思っていた。

「森尾さん、でしょ」

沢井が驚いたように私を見た。森尾は、私がアパートを借りるために使っている名だ。

私は初めて気づいたふりをして、女を見やった。

「なんだ……。由紀か」

「おつどろいたあ。なんで森尾さんがここにいるの？」

「俺だって酒を飲むぜ」

「じゃここ、森尾さんの行きつけ」

「まあな」

由紀は首をふった。

「ずっと森尾さんのことを考えていたの。ここにくるまで」

私は息を吐き、自分のジントニックのグラスをつかんだ。由紀のブースまで歩みよった。由紀は嬉しそうに横にずれ、私の席を作った。

「待ちあわせじゃないのか」

「そうだけど、会ったことのない人なの。ジョーカーって渾名の人、知ってる？」

私は首をふった。

「いや。そんなにしょっちゅうくるわけじゃないんでね」

「あたしなんて六本木なんかほとんどでないから、道に迷いまくっちゃったわよ」

「そういえば、今日は仕事、休みか」

「休みにしたのよ」

由紀は怒ったようにいった。

由紀を知ったのは、一年半前だ。彼女の仕事は、表向きマッサージ師ということになっている。その当時は「ひびきマッサージ」という、新宿にある大手のマッサージ店にいて、女性マッサージ師としては、指名度の一、二を争う売れっ子だった。

現在、東京にあつてビラを配るような大きな出張マッサージ店はほとんど、通常のマッサージ師と、オイル・パウダーマッサージ専門の若い女性マッサージ師の両方を抱えている。

由紀は、オイル・パウダーマッサージの専門だった。

オイル・パウダーマッサージは、この三、四年で一氣に市場を広げた業界である。それまでは、中年の女性マッサ